

自分の生まれ故郷でもないくせに、スイスが好きだという日本人旅行者に親切にしてくれたり、新しくスイスに住むことになった日本人を歓迎したりし始めると、ようやく「スイス在住」許可が下りたような気がして、自分で自分の事が微笑ましくなったりすることはないだろうか。

今回は、新しくスイスと関係を結んだ日本人を是非皆様にご紹介したい。昨年11月に、ジュネーブを本拠地とするスイス・ロマン管弦楽団の首席客演指揮者に就任した山田和樹氏だ。1979年神奈川生まれの若手最注目株の山田氏は東京芸術大学の指揮科を卒業後、2009年に小沢征爾などを輩出したブザンソン国際指揮者コンクールで優勝、聴衆賞も受賞した。その他、出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、文化庁芸術祭賞音楽部門新人賞も授与されているが、「賞を頂けることは嬉しいけれど、甘んじちゃいけない。賞をもらったからどうって現場の世界ではないので」と、華やかな受賞経歴に流されない、地に足の着いた考え方だ。

そんな山田氏は「イチロー顔負けの"打率"の高さ」と例えられるほど、ミシェル・ブラッサンの代役で指揮したパリ管弦楽団でも、小澤征爾氏に任されたスイス国際音楽アカデミーやサイトウ・キネン・オーケストラでも好評を博し、スイス・ロマン管とは、2010年6月10日の演奏会に、急な代役を依頼され、一回共演しただけで「首席客演指揮者」のポストに任命されたという。

学生時代に自身で創立した横浜シンフォニエッタの音楽監督をはじめ、N響副指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢ミュージックパートナー、東京混声合唱団レジデンシャル・コンダクターを勤め、さらに昨年日本フィルの正指揮者、仙台フィルミュージックパートナーにも就任したばかりで、山田氏の勢いは留まる所知らない。

**実** は前から気になっていたことがあった。ドラマ化もされたクラシック音楽コミック『のだめカンタービレ』で主人公が想い続ける指揮者志望の「千秋先輩」のモデルになったのは山田和樹だ、という噂だ。以前の会報でご紹介した広上淳一氏も実はこのマンガに描かれているのだが、彼は作者から正式に許可を求められて出演(?)したそうだ。そこで山田氏に直接聞いてみた。「千秋先輩は複数のモデルがいると聞いています。ただ、学生時代からオーケストラを作ったり、僕のやってきた事が描かれているとは思いますが。フランスの著名なコンクールで優勝したのは、千秋先輩の方が先だったけれど」と、部分的だが肯定されたようで、やっとすっきりした。

そんな一種不真面目な質問から切り替えて、昨年11月30日から12月2日にかけて行われた首席客演指揮者就任コンサートでの手応えを尋ねてみた。「タイトルをいただいはじめての演奏会ということで、とても緊張して臨みましたが、オーケストラは以前の通り、いやそれ以上に好意的に受け入れて下さって嬉しかったです。メインのベートーヴェン作曲『英雄』交響曲は、スイス・ロマン管もしばらくぶりに取り上げたそうですが、ベートーヴェンの曲の中でも特に難しいこの交響曲で、新しい関

係をスタートできて、とても良かったと思っています」

「演奏中は本当に至福の時に、指揮台に立っている自分の身体がオーケストラの放つ音に溶けるような、自分の体重がなくなったかのような感覚でした。3年の任期を良いスタートで始められたと思います」

この言葉に誘われて、2月のコンサートシリーズを取材しに出掛けた。特にショスタコーヴィチのピアノ協奏曲第一番が素晴らしかった。ロシアの大地を吹き抜ける風の匂いすら感じさせながら、オーケストラのフレーズで背景を創り上げる。それをバックにピアニストが雄弁に語り、その音にオーケストラが重なる度に、憂いを含んだ音、透明な音、美しい音達がそれぞれの色を乗せていって、モノクロだった風景画がどんどん色彩鮮やかになっていくような演奏だった。最後の音が途切れると、誰かが漏らした感嘆のため息のような「ブラヴォー」が客席に染み渡った。

隣に座ったお年寄りが微笑みかけてきた。「このマエストロは、若いのに統率力があって凄い。永年定期公演の会員になっているが、このオーケストラの創設者が退いた後、初めて、この指揮者があの頃のレベルに到達させてくれた。マエストロに伝えてくれたまえ。今晚貴方は、この地に心の友を沢山得たはずだ、と」と感動を伝えてくれた。

世界の山田和樹となっても、人間らしさは忘れない。昨年9月7日には東日本大震災復興コンサートを行い、10月には「心に花を咲かせようプロジェクト」と共に、CD録音、被災地訪問を開始した。2014年には山田氏が率いるスイス・ロマン管の来日ツアーが計画されている最中だが「彼ら連れて、被災地でコンサートができたら...」と希望を語る。「人間関係が財産」「音楽は人生そのもの」と語る山田氏が、人生そのものである音楽を通して財産である人間関係をどんどん広げ、日本を元気にしてくれながら世界を少しでも平和に導いて欲しい、と期待が膨らんでいく。

最後にJCZの皆様にご挨拶を申し上げますと「スイスはずっと大好きな国でした。チューリッヒやベルンにも振りに行きたいです。これから頻りにスイスに来ることになります。是非コンサートを聴きにきて下さい。そして楽屋に会いに来て下さい」と言われた！「え、そんな事書いていいんですか？」と念を押すと、初めて廻りを見回し「あ、それでは書かないで下さい」と突然心配になったようだ。それほど、根本的に人間好きな山田和樹氏。実際に会ってみたいってしまった会員の方は、是非下記の処方箋をお試し下さい。楽屋口でお待ちをしてみると、きっとこれからの人生が豊かになることでしょう。この会報を持参したらきっと喜ばれると思いますよ！

## 音楽の処方箋

文/中東生



### 第7回 スイスへようこそ

スイス・ロマン管弦楽団公演/Victoria Hall, ジュネーブ  
 5月8日(水) フォーレのレクイエム短調、ラヴェル『ダフネとクロエ』 Gabriel Fauré Requiem en rē mineur op.48, Maurice Ravel Daphnis et Chloé, ballet en trois parties  
 5月12日(日) ラヴェル『ダフネとクロエ』  
 Maurice Ravel Daphnis et Chloé, ballet en trois parties 詳細は <http://www.osr.ch/>

